
インフィニット・ストラトス～剣の魔物～

通り過ぎりのデュエリスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス〜剣の魔物〜

【Nコード】

N1722BA

【作者名】

通りすがりのデュエリスト

【あらすじ】

若干15歳にして傭兵として世界各地を飛び回っていた主人公、
蓮見一季^{はすみ いつき}。

ある紛争地域で運命的な出会いを果たす。

「私は1日を35時間生きる、天才篠ノ之束^{しののめ}だよ。ラブリー束さん
って呼んでね。」

その出会いの1ヶ月後、一季はIS学園に編入する。

プロローグ 奇妙な天才との出会い（前書き）

どうも、初めての方ははじめまして。そうではないからは改めて
よろしく願います。

初めてISの小説を書かせていただく通りすがりのデュエリスト
です。

いろいろと未熟な部分はあると思いますがよろしく願います。

プロローグ 奇妙な天才との出会い

とある戦時中の小さい国

この国の国防上重要な地点で隊長の座に位置する男が高笑いしていた。

「ハツハツハツ！この圧倒的な布陣！どんな大軍が押し寄せて来ようとも突破出来るものではない！」

1000台をゆうに越える戦車。この男の言う通り、通常ならば軽々しく突破出来るような軍勢ではないだろう。

「まあ、ISでも来れば別だろうがこんなところに来るわけがないからな！」

この男の言うISとは、正式名称「インフィニット・ストラトス」
。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだ。

しかし、制作者の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持て余した機械は兵器へと変わり、しかしそれは各国の思惑からスポーツにと落ち着いた 所謂、飛行パワードスーツだ。

このIS、攻撃力、防御力、機動力、その全てが他の兵器を凌駕

している。故にISが登場したことで他の兵器はもはや鉄クズ同然となり、世界の軍事力（正しくは有事の際の防衛力）はISをどれほど保有しているかによって左右されることになった。

しかしそのISには致命的な欠陥がある。それはなぜか女性にしか反応しないこと。そのせいで世界中で女性優遇制度が取り入れられ、あつという間に女尊男卑の風潮が高まっていった。それが今の先進国の状況、というわけである。

「さて、敵はどう攻めてくるかな。まあ手出しなんて出来ないと思うがな！ハッハッハッ！！」

高笑いする男の余裕の態度とは裏腹に緊迫した雰囲気、隊員が司令室の扉を開けた。

「隊長！！敵襲です！！」

「なに？だが焦る必要はない。この布陣は突破出来るものではないからな！」

「いえ、それが」

「ま、まさか ISか！？」

この男は自分の隊の布陣を崩せる唯一の可能性、ISの登場かと思っただが隊員の口から発せられたのはその考えからかけ離れた言葉だった。

「いえ 非常に信じがたいことなのですが 敵は人間1人です！！」

「はあ!？」

これは誰でも信じられないだろう。100台を越える戦車部隊がたった1人の人間によって突破されてるというのだから。

「そんなバカなこと」

そう言い掛けた時、本部の前を防衛していた戦車が爆発する音がした。

「なっ!？」

「隊長!!ここは危険です!!速やかに脱出を」

隊長に脱出を促す隊員。しかしもう既に逃げるには遅かった。

「まったく行動が遅えよ。逃げんならもっと早く脱出しろよ。」

何故なら隊員の首を刀で斬り落とし、部屋の唯一の出口の前に侵入者が立ちふさがっているのだから。

「あ。あ。」

「さて。てめえを殺せば終わりだ。」

侵入者が隊長にゆっくり近づく

「ま、待て!少し話しあ」

隊長は最後まで言葉を発することなく、侵入者の手によって首を刎ねられて絶命した。

「目の前の敵と話し合えるほど戦場は甘くねえんだよ。」

そう言い残し、侵入者は生きて人間がいなくなった基地を後にした。

「今回も大したことなかったな。」

先ほど軍事基地を殲滅した侵入者 蓮見一季はすみ いっせきは悠々と基地の管轄内を歩いていった。

この蓮見一季、15歳にして世界中の紛争地帯に飛び戦う傭兵なのだ。実力は先ほどの戦いを見れば明らかだろう。そして

「あんな大掛かりなことをやった後にそんなにゆっくり帰って援軍は来ないのか？」

仮にそう聞かれたら彼はこう答えるだろう。

「援軍？上等だ。来たら来たで1人残さず殺せばいい。」

と。

「さて、次の依頼は 篠ノ之束の捕縛、か。」

この篠ノ之束、先ほど解説したISの開発者である。

ISを開発したことで政府の監視下に置かれていたが、約3年前に突如失踪。それ以来行方不明なのだ。そして現在も各国政府に終われている。

「さて、どうやって探すかな。」

そう一季が思案しているその時、上空に何かの気配を感じて空を見上げる。そこにあったのは

「ニンジン?」

そう、上空からデフォルメ調のニンジンが落ちてきているのだ。

「。」

そのあまりのシュールさに一季は固まってしまった。空飛ぶニンジンを見たら誰だって驚いて言葉を失うだろう。

「!やべえ!」

固まってしまったせいで反応が遅れ、ニンジンが直撃しそうになる。

一季は咄嗟に刀を2本抜き、ニンジンを受けとめた。上空から猛スピードで飛んでくるものなど普通なら止められるわけがないだろう。しかし

「はあああああ！！」

一季は刀2本で受けとめた。そして

「ぜえいつ！」

受け流すようにニンジンを払った。勢いそのままニンジンは地面に突き刺さる。

「何なんだこりゃ。」

地面に刺さったニンジンを見ながら呟いた。するとニンジンが半分に分かれ、パカッと開いた。

「やあやあ、噂通りのパワーだね。思わず感心しちゃったよ。」

割れたニンジンから現れたのは腰まである長い髪、青と白のワンピース、頭には何故かウサミミを着けている、1人で不思議の国のアリスを体現している女性。明らかに怪しい。

「あなた 誰だ？」

一季は身構えて警戒する。戦場にニンジンに乗って不思議の国のアリスもどきが降ってきたら一季ではなくても警戒するだろう。

「まーまーそう警戒しないで、ふれんどリーにいこーよ。」

そう言って1人アリスは手を差し出す。

「何のつもりだ？」

「握手だよ。」

「なぜ握手？」

「早く信用してもらおうのにはこれが一番手っ取り早いからね。」

そう言うアリスもどきの目を一季は見る。

一季はその相手の目を見れば相手のことがある程度わかる。まさに目は口ほどに物を言う、と言ったところだ。しかし

「（こいつは）！」

その目を見た瞬間恐怖が沸き上がった。まるで全てを見透かされるような。

「どーしたの？」

聞こえてくる呑気な声。その声の主と同一人物とは思えない目。一季はこの2つの要素から目の前の人物はただ者ではないと判断した。

そして

「わかったよ。」

一季は握手に応じた。これは一季が相手のことを認めたといいこととなる。

「うんうん、しんよーしてくれたみたいだね！じゃあ早速いこー！」

いきなり一季の手を取ってニンジンの方へ引っ張っていく。

「は！？どこに行くってんだよ！それにあんた誰だよ！」

いくらただ者ではないとはいえさつき知り合った人物にいきなり着いて行くほど一季はバカではない。むしろ着いて行きたくない。

「あつ、そーいえば自己紹介してなかったね。」

一季の手を離してくるりと方向転換する。

「私は1日を35時間生きる、天才篠ノ之束しのあづなだよ。ラブリー束さんって呼んでね。」

それが蓮見一季と篠ノ之束の出会いだった。

そして1ヶ月後

「ふう。」

場所は日本、一季はある場所に行くために電車に乗り、たった今降りたところだ。

「。」

目的地に向かって歩きだす。その足取りは幾分か軽いように見える。

「久しぶりの学園生活、どうなるかねえ。」

そう呟いた後は無言で歩いた。

「ここか。」

目的地に到着したところで足を止めた。その目的地とはIS学園。IS操縦者や技術者を養成するために設立された特殊国立高等学校。

「さて、受付はどこかな。」

この瞬間から蓮見一季のISS学園での生活が始まった。

プロローグ 奇妙な天才との出会い（後書き）

いかがでしたか？

原作キャラを書くのは初めてなので口調や性格が変わっていないか心配です。束さん難しい。

さて、主人公の一季ですがプロローグ時点で既にチートですね。100台以上の戦車を突破して司令塔にいた人間を残さず殺してますからね。どうしてこうなったか自分でもわかりません。

私自身未熟な上にもう1つ連載を抱えているので更新は遅くなると思いますがこの小説をよろしく願います。

第1話 編入（前書き）

一季がIS学園に編入します。

ちなみに原作の2巻からスタートです。

第1話 編入

S i d e 一季

オレは今IS学園の廊下 これから編入するクラスの目の前にいる。え？試験？一言で言えば楽勝だった。ここに詳しく書くまでもねえ。

で、何の因果かオレの他にも2人転入してきてる。それがオレの両隣にいるんだが 何か知らねえが1人は男なんだよな。I Sって女にしか使えねえはずだろ？何でオレも含めて例外が3人もいるんだ？

後1人の例外の織斑おりむら いちか一夏もこのクラスにいるみてえだし ま、これは考えてもじゃあねえよな。

で、もう1人は女だが黒い眼帯まで着けたガチ軍人。冷たい雰囲気
気を隠そうともしねえ。

なんつーか キャラ濃いな。男3人にガチ軍人、さらに束さんの妹にイギリスの名家のお嬢様。パツと見るだけでもすげえよな。

おっ、考えてるうちに出番みてえだな。さて、どんなやつらがク

ラスメイトなんだろうな？

「失礼します。」

金髪の男がそう言って教室に入る。オレと軍人は黙って入る。

さっきまでざわついていたのか教室内の空気が固まる。

そんな空気がわかってるのかわかってないのか、金髪の男は気にせずに挨拶する。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします。」

「そう言うてにこやかな顔で一礼する金髪の男　シャルル・デュノア。」

オレら転入組以外の教室内の生徒が呆気に取られている。

「お、男　？」

「しかも　２人　？」

「はい。こちらにボクと同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を」

「きゃ」

「はい？」

『きゃあああああー！ーっ！ー！』

うおっ！耳に響く！女子の歓声ってこんなに響くもんだっけか！？

「男子！うちのクラスに男子！」

「しかも2人！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「それに見た目ワイルド系の肉食男子！」

「地球に生まれて良かった〜〜〜！」

ワイルド系の肉食男子　オレの印象そんななのか。って肉食男子ってなんだ？長い間戦場にいたから最近の流行語とか知らねえんだよな。

「あー、騒ぐな。静かにしろ。」

面倒そうにぼやいてるのはこのクラスの担任で織斑一夏の姉、織斑千冬。第一回モンド・グロツソ　まあISのオリンピッククみた

いなもんだな。その優勝者。通称、戦女神。ブリュンヒルデ まあ束さん曰く優勝は必然だったらしいが。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

この人は副担任の山田真耶。こうして見ると頼りなさげだが実は昔代表候補だった実力者らしい。そして無駄に胸がデカい。あんなデカかったら邪魔だろうな。

そう考えてるうちに教室が静かになる。これは　オレが言うべきか。ガチ軍人は言う気なさそうだし。

「えー　オレは蓮見一季。まあ見ての通り男だし何かと気遣うかもしれないがよろしくな。」

ふう　こんなもんか。まあ無難な挨拶だろ。

で、もう1人　ガチ軍人の番なんだが　未だに何も言わねえ。下らなそうな目で教室の女子たちを見たかと思えば今度は織斑先生（昨日会った時そう呼べと言われた）に向けている。

「挨拶をしろ、ラウラ。」

「はい、教官。」

いきなり佇まいを直して素直に返事する。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ。」

「了解しました。」

そう返事して軍隊式の敬礼をするガチ軍人ことラウラ。堅苦しいなあ。ああいうの苦手なんだよな。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

「。。。」

しばらく沈黙。全員次の言葉を待っているがラウラからの次の言葉はない。

「あ、あの、以上 ですか？」

「以上だ。」

山田先生が聞くが見事に即答。先生、情けないからそれぐらいで泣きそうにならないでくれ。

ふとラウラの視線が一点に止まる。そこには1人の男。なるほど、こいつが織斑一夏か。パツと見ただけじゃただの高校生にしか見えねえが。

「！貴様が」

そう言うつと一夏の方に向かっていく。こいつ、何かする気だな。

ガシッ！

「!!!」

オレはおそらく一夏を平手打ちしようしただろウラウラの右手を掴んで止めた。距離は多少あったが大した問題じゃねえ。

「貴様 何をする。」

手を振りほども、ラウラはオレを睨む。一般人なら怯む迫力だがあいにくオレは普通じゃねえ。

「初対面の相手をいきなり殴るのは感心しねえな。やるなら軍人らしく宣戦布告してからにしろ。」

「貴様 ！」

「それに今はHR中だろ。変な火種蒔いて先生を困らすんじゃない。」

ほら、山田先生もう涙目になってるじゃんか。織斑先生も面倒くさそうな顔してるし。

「フン。」

これ以上は無意味だとわかったのかラウラはとっとと空いている席に座り、腕を組んで目を閉じた。まったく何なんだあいつは。

「あーゴホンゴホン!ではHRを終える。各人はすぐに着替え第2グラウンドに集合。今日は2組と合同でIS模擬戦を行う。解散!」

織斑先生が手を叩いて速く行動するよう促す。つてオレ更衣室どこか知らねえよ　こうしてる間にも女子は着替える準備をしている。

「おい織斑、デュノアと蓮見の面倒を見てやれ。」

あ、そうだ。一夏に案内してもらえばいいんじゃないか。

「君が織斑君？はじめまして。ボクは」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから。」

挨拶するシャルルの言葉を遮り一夏はシャルルの近くにいたシャルルの手を取って教室を出る。つて！

「ちよつと待て！オレを忘れんなよ！」

オレは急いで2人を追い掛ける。幸いそこまで距離があつたわけじゃなかったからすぐ追いついた。

「置いてくなよ！道わかんねえんだから！」

「悪い！だけど今はそんなこと言ってる場合じゃない！」

そう言つてスピードを上げる。何でこんなに急ぐんだ？

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから2人とも早めに慣れてくれ。」

「ああ。」

「う、うん。」

普通に返事するオレに対してさっきとは違って落ち着かないシャルルに一夏が聞く。

「トイレか？」

「トイ　っ違つよ！」

じゃあ何なんだよと思ったが聞かないでおく。さすがに初対面の相手にはそこまで積極的にはなれねえ。

「そうか。それは何より。」

そんな会話をしながらも走っていく。階段を下って1階に来た時。

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君と一緒に！」

HRが終わったのか女子が駆け出してきた。ああ、こんなに急いでるのはこういうことか。

「いたっ！こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

「この学園はいつから武家屋敷になったんだ!？」

オレのツツコミに何故か歓声上がる。ツツコミには歓声じゃなくて笑い声だろ。

「織斑君の短い黒髪もいいけど金髪や長髪っていうのもいいわね！」

「しかも瞳はエメラルドと紫！」

「きゃああつ！見て！あの2人！手繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

「いや、来年以降ももっといいものあげろよ！お母さん可哀想だろ！」

このツツコミにもまた歓声。だから歓声じゃなくて笑い声だろ。

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

「そりゃ男子がオレたちだけだからだろ。」

「？」

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦出来る男って、今のところオレたち3人しかいないだろ？」

「あつ！ああ、うん。そうだね。」

「それとアレだ。この学園の女子って男子と極端に接触が少ないから、ウーパールーパー状態なんだよ。」

「ウー 何？」

シャルルがわからないみてえだからオレが解説。

「ウーパールーパーっつーのは正式名称メキシコサラマンダー。両生類の一種だ。1980年代に焼きそばのCMで有名になって以来その見た目とかもあって一時期流行った動物だ。ちなみに食える種類もいる。」

「マジで!？」

「ああ、マジだ。」

実際食ってるの見たことあるしな。

「というか何でそんなに詳しいの？」

「親に一般常識だつて騙されて教わった。」

「何で騙してまで教えた!？」

全くだ。何で騙してまで教えたんだか。

そんなことを喋りながら女子の大群という名の包囲網を突破していく。つーかなんだよこの団結力!？なかなか抜けられねえ!

そんな中一夏が不意に言った。

「しかしまあ助かったよ。」

「何がだ？」

「いや、やっぱり学園に男1人はつらいからな。何かと気を遣うし。2人もいてくれるっていうのは心強いもんだ。」

だろうな。1人つてのは辛いもんだ。

「そうなの？」

そうなのって　こいつ大丈夫か？さっきも世界で3人の男のI S操縦者って自覚なさそうだったし　。

「ま、何にしてもよろしくな。オレは織斑一夏。一夏って呼んでくれ。」

「うん。よろしく一夏。ボクのことシャルルでいいよ。」

「オレも一季でいい。むしろ名字じゃ落ち着かねえ。」

「わかった、シャルル、一季。」

走りながら挨拶を交わしてるうちに大群から逃げられたみてえだ。

「よし、到着！」

ふう　　やっと着いたぜ　　。大して走ってねえのにすげえ疲れ
た　　。

「うわ！時間ヤバいな！すぐに着替えちまおうぜ！」

そういわれて時計を見るとかなりヤバい時間だ。こりゃ急がねえ
とマズい。

一夏は慣れた手つきで制服のボタンを一気に外し、Tシャツも脱
ぎ捨てた。オレもそれに習って着替えようとするが

「わあっ!?!」

シャルルの悲鳴で手が止まった。なんだなんだ？

「荷物でも忘れたか？って何で着替えないんだ？早く着替えないと
遅れるぞ。シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそり
ゃあ時間にするさい人で　　」

「う、うんっ？き、着替えるよ？でも、あの、2人ともあっち向い
てて　　ね？」

なるほど、着替えを見られると落ち着かねえってことか。

「????いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが　って、シャルルはジロジロ見てるな。」

「み、見てない！別に見てないよ!?!」

シャルルは両手を突き出し、顔を床に向ける。こいつ　何かあるのか？

「まあ本当に急げよ。初日から遅刻とかシャレにならない　といつか、あの人はシャレにしてくれんぞ。」

そう言っって後ろを向く一夏。何か妙だと思いつつもオレもそれに習い、後ろを向き着替える。

「　。」

何か視線が　だが急がねえとマズい。オレは気にせず着替える。

だが一夏は気になったらしく、振り返る。

「シャルル？」

「な、何かな!?!」

後ろからジッパーを上げる音。どうやら着替え終わったらしい。早えな　。

「うわ、着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか?」

「い、いや、別に　って一夏まだ着てないの?」

「これ、着るときに裸ってなんか着づらいんだよね。引っ掛かって。」

着替え終わったオレはシャルルの方を向いて話に入る。

「確かに引っ掛かって着づらかったな。」

「ひ、引っ掛かって？」

「「おう。」」

あ、ハモった。

「。。。」

何故かシャルルが赤くなる。

怪しい。何か隠してるな。

「よし、ど。よし、行くぜ。」

「おう。」

「う、うん。」

全員着替え終わり更衣室を出る。

その途中一夏がシャルルを見て言う。

「そのスーツ、なんか着やすそうだな。どこのやつ？」

「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランク
スだけど、ほとんどフルオーダー品。」

「デュノア？デュノアっつーと量産機シェアが世界3位だかの大企
業か？」

「うん。父がね、その社長をしてるんだ。一応フランスで一番大
きいIS関係の企業だと思う。」

「へえ！じゃあシャルルって社長の息子なのか。道理でなあ。」

一夏が納得したように頷く。オレもまあ納得出来るところがある。

「うん？道理でって？」

「いや、なんつうか気品っていうか、いいところの育ち！って感じ
がするじゃん。納得したわ。」

「いいところ ね。」

明るい顔の一夏とは対照的にシャルルは複雑な表情だ。家族とな
んかあったのか？

その表情をすぐに元に戻し、シャルルが一夏に言う。

「それより一夏の方がすごいよ。あの織斑千冬さんの弟だなんて。」

「ハハハ、こやつめ！」

「へ(は)?」

意味がわからねえ。なんだその返しは?

「いや、なんでもない。まああれだ。お互い地雷を踏んで一機ずつ減ったってことで。」

これもわからねえ。つか地雷踏んだらそれどころの騒ぎじゃねえぞ。

「????よくわからないけど」

「それにその基準で言うとオレ地雷踏んでねえから一機も減ってねえんだが。」

「あ」

一夏 完全に忘れてやがったな。

「ゴホン。シャルル君、一季君、物理の問題です。」

「なんでいきなり君付け?」

「そしてなんで物理?」

「いいから。高速下での運動における物体aが受ける抵抗力は?」

「えっと、物体aね速度に二乗」

「そういうことだ。」

「どじいじことだよ。」

「。」

「。」

しばらく沈黙。こいつのギャグはこんな効果があるらしい。

「ぶつ あははっ！なにそれ。ふ、ふふつ。一夏っておかしいなあ。」

シャルルが突然笑い出した。こいつもよくわかんねえな 悪いがオレは笑えねえぞ。

「同じ笑われるなら「ハハハこやつめ！」で返して欲しかったぜ。」

「もー、拗ねないでよ。一夏のギャグセンス、褒めたんだから。」

こいつのギャグセンス評価できるか ？何となくオヤジ臭いよ
うな気がするんだが。

どことなくいい関係になりつつある2人を見つつ、オレはこれからどう溶け込もうかと考えながらアリーナまでの道を歩いていった。

第1話 編入（後書き）

いかがでしたか？

今回はほぼ原作沿いなのでキャラのセリフもだいたい同じです。
一季も暴れてませんし。

次は戦闘に入る　　かなあ？いや、入りたい　　。

というわけで次は一季の初陣になると思います。

ではまた次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1722ba/>

インフィニット・ストラトス～剣の魔物～

2012年1月6日12時48分発行